

配なく。おきき下さいこの元気な笑声を「アッハハ」では帰れる日まで、暗い手製のランプの光で、食い気一方色気なしの若武者 幸義より」

昭和二十三年九月十七日、ナホトカから舞鶴に復員、帰宅して親父からこのはがきを渡されたとき、目を疑うほどの驚きでした。

毎年八月十五日が来るとこのはがきが、あの苦しかった抑留生活を励まし合い、助け合った同僚たちへの感謝と思いい出の縁になっています。

「語り合って眠った友は、

朝起きたら冷たくなっていた」

広島県 増川 寛爾

◎今日は忙しいところ、ご苦勞さまです。最初働かされたのはどこでしたか、これから約三十分ぐらいの時間をお借りして、当時の様子を聞かせてください。

私は増川です。

東京ダモイにだまされながら、約千人の大部隊が十か月ほど引き廻されて、ある町に入りました。

◎それは、何という町でしたか。

ウオロシロフという、炭坑町です。

◎これから、その炭坑の様子を聞かせていただきますが、途中十か月も歩かれたようですが、みんな元気でしたか。

それが行軍の途中、疲労のため、落伍者が続出、その人たちがどのようなようになったかわかりません。何しろ私自身、歩くのが精一杯でしたし、到着しても身体を動かすのがやっとでした。

◎で、到着されたところの施設は、増川さん等をどんなに受け入れてくれましたか。

それがとんだ施設で、何しろ、三重の有刺鉄線の柵の中に入れられ、四方のやぐらから、自動小銃を持った兵隊が見張っているんです。

虎の檻の中へ追い込んだようなものです。

◎私が収容されていた、カラカンダーのラーゲルも同じようでしたよ。それからどうしましたラーゲルは。

それが大変なんですよ。ソ連兵が「お前たちは今から家を作れ、寝るところを作れ……」何人だったかよく覚えていませんが、残りの者は作業に出されました。◎寝るところもなかったんですね。で、どうしました。家がすぐできるわけではないでしょう。

寝るところができる間は、毛布をかぶって野宿ですよ。土造りの寝るところが出来上がると全員、今まで廃坑になっていた炭坑作業が始まりました。夜昼八時間交替の作業です。これから過酷な強制労働が始まりました。落盤、ガス中毒、死亡者も続出、食べる物は朝、米または高粱の粒が一つ、二つと数えられる飯ごうの中ぶた一杯の水粥。少したつ頃から、炭坑の帰りに道端の野草等を入れて量を増やす工夫もやりましたが、何を入れてもおかゆでした。

昼食は黒パンにぎり、朝一度に食べてもまだ空腹で到底八時間の労働には耐えられません。

◎私たちも同じでした。それでみんなはどうでしたか。皆、瘦せ衰えて、骨と皮の身体です。全員栄養失調です。死亡者も次々と多くなるばかりでした。こんな

こともありました。寝る時は三人で、一枚の毛布を板の上に敷いて、二枚をかけるんです。広島県の人で、入隊の時一緒の「正木茂」君と一組になって、毛布をかぶっての話の中で「増川、わしはのうー到底日本へは帰ることはできまあね、シベリアで死ぬだろう。」と弱気のことを話すのです。彼は極度の栄養失調で、それでも作業に出されていたんですよ。私は「正木よ、そんな弱気なことを言うな、もっと強い心を持って」とはげました。が、その晩二人で寝ついたのが最後でした。翌朝起こしても起きない。冷たい体になっていました。

◎増川さん、少しやすましましょう。

（私は涙ながらの増川さんに、隣の部屋で涙をふいてもらいながら、こんな事実をどのように表現してあげようかと考えさせられました。気を取り直して次の質問をしたことです。）

◎増川さん、私にも同じような体験がある。人ごととは思えない。で、その人は。

正木君にも妻子や親もあつたと思います。

当時は、寝ること、食べることに、なんとか頑張って日本に帰ることのみの一日一日で、正木君を運んだ居室には、何十人かの屍が積み重ねてありましたよ。翌日、小さい木のあるラーゲルから三、四十分ぐらいのところへ、他の人と一緒に馬車で運びました。

◎じゃあ増川さんが現地まで行かれたんですね。

行きましたよ。穴を掘ろうとしても、凍結のため十センチ程度しか掘れず、そこに他の物と一緒に付近の枯れ草をかけただけでした。私は板片に名前を書いて立ててやりました。

その時、ソ連兵の目を盗んで、正木の人差し指を切断し、スコップの上で焼いて小さい骨を取って、ラーゲルにこっそり持ち帰り、いつも大切に服の中に入れていました。

◎で、その遺骨はどうしたのですか。

いつも大切に持っていました。その後、ナホトカで入浴の時、別の服が支給され、その指を前の服のまま取られてしまいました。

今でもあの時のことが思い出されて残念に思います。

その後、私も疫痢病にかかり、伝染病患者を収容するラーゲルに送られました。

そこには三十人ばかりの患者が、皆死の一步前をさまよっている者ばかりです。この病気は喉が特別乾くのです。入口に備えつけられた防火用水の水を飲みに行くんです。一口飲めば終わりです。私も三度ばかり用水のところまで行きました。何とか我慢して飲みませんでした。気の弱い者がそれを飲み始めると、一杯飲み続けます。すると、二十分〜三十分すると必ず死んで行きました。気の弱い者は自分から命を縮め、精神力の強かった私はかろうじて命を長らえました。その後、奇跡的に回復に向かい農場のラーゲルに送られ、馬鈴薯や野菜のおかげで少し健康になり、それから。

◎それから、別のラーゲルに移動したのですね。そのラーゲルはどんな仕事でしたか。

建築関係。セメント工場、砂糖工場などです。その頃から外部のソ連人との接触も多く、空腹を余り考えないでよい時もありましたが、さらにその後、山奥に

入らされて伐採の仕事は炭坑と同じくノルマが上がらず、そこでも相当の死者が出ました。

◎ありがとうございます。随分と苦勞され、沢山の死没者を目撃され、特に正木さんを自分で埋められ、骨を持ち帰ろうとされた増川さんに頭が下がります。最後に増川さんが生き続けられた一番の理由は精神力ということに尽きると思いますが。

入ソ当時の隊長が、朝の訓辞の中で「仕事はソ連のもの、体は自分のものだ」「体を第一に考え、大切にしろ、日本に帰り着いてくれ」と言われた言葉が今も忘れることができません。精神的とはいえ、あれだけの非人道的な扱いの中で死んで行く、それも殺された方々が未だ凍土の中にあることを知る私たちは、一日も早く日本の土の中に埋めてあげ、眠ってもらいたいと思います。

◎ありがとうございます。随分と時間をとって下さいました。増川さんの思いと全く私も同感です。ありがとうございます。

(聞き手・全抑協広島県連会長 山田 浩造)

戦車に怯える抑留への道

熊本県 酒井 國良

聞き手 本日はお忙しい中を、聞きとり調査のためにご強力いただきまして、まことにありがとうございます。

終戦後、あなたはシベリアに強制抑留をされ、しかも酷寒の地で重労働に従事させられて、引き揚げてこられました。この労苦を、再びこのようなことがないように、後世のために、ただいまよりとくとお話しをお願いしたいと思います。どうぞお願いします。

酒井 私には酒井國良でございます。戦車に怯えるという意味をこれから話してみます。昭和二十年一月十五日、博多に集合し、渡満、ケイネ七〇〇〇部隊に入隊しました。初年兵は、移動に追い回されながら、一期の検閲もようやく終え、八月一日、一等兵に任命さ